

「食べずに死ね」と言えますか

「食べられなければ食べずに死になさい。何で死ぬのも同じことです。」

これは、士別市出身の彫刻家で「昭和の左甚五郎」といわれた阿部晃工さんの母トメさんが、我が子晃工さんに宛てて送った手紙の一部です。

「食べずに死ね」とは、なんてひどい親なのだろうと感じる方もいるかも知れませんね。

晃工さんも、この手紙を読んで一時は茫然としたそうです。

晃工さんが、彫刻家としての道を歩もうと上京したものの、若くそして無名の彫刻家にとって、その道は余りにも険しいものでした。生活に困窮し、進退窮まってふるさとに帰りたいという手紙を母親に出した、その手紙への返書の一部が「食べずに死になさい」というものでした。

晃工さんの実家自体が大変厳しい生活だった、ということをお頭に置いて、もう少しトメさんの手紙を読んでみましょう。

「手紙見ました。大分困って居るやうですね。(中略) 帰ると云いますがそれはいけません。(中略) 今家は大変です。一銭の金も送ってやれません。(中略) 母はお前を天才児として育ててきました。母は、それが誇りだったのです。今はお前も一人前の人になりました。その一人前の人間が食べられないから帰るとは何事です。(中略) 母は末っ子のお前を甘やかして育てたのが悪かったのですけれど、そんな、そんな意気地なしには育てないつもりです。食べられなければ食べずに死になさい。何で死ぬのも同じ事です。(中略) お前は母がいつ迄も優しい母だと思って居るのは間違いです。そんな意気地なしは見るのもいやです。」

帰ってきて家へは入れません。死んで死んで骨になって帰ってきなさい。(以下略)」

今日、親が我が子を虐待する、投げつけて殺したり食事を与えず餓死さたりと、聞くに堪えない悲惨な事件が後を絶ちません。

そうした事件の当事者の親とトメさんとを対比するのは誠に失礼ではありますが、その違いはどこにあるのでしょうか。

それは、母親としての底なしの愛情の深さであり、如何なることがあっても壊れはしない親子の絆の強さではないか、と思います。親子の絆の強さがこの手紙を書かせたのだと思います。

私は、先般、土別市博物館に無理をお願いして、手紙の写しを送っていただきました。

行間からは、単に突き放しているのではない、助けたくても助けることができない母としての悲しさが滲んでいるように感じました。恐らくは、自分の気持ちを奮い立たせて書いたであろう手紙を読みながら、慟哭する母の声が聞こえるようです。

晃工さんは、この母親の手紙に対して「ああ、お母さんは、これほどまでに僕の成功を祈ってくれるのか、かわいい子供に、死ねといえるほど僕を励ましてくれるのかと思うと、僕は思わず泣いたですよ。」と述べています（「何が彼を発奮させたか」感激実話全集第10巻）。

この手紙の最後には「一日も早くお前が死んで骨になって帰って来る日を母は待って居ります。」と書かれています。

トメさんは、本当は息子に直ぐにでも会いたかったのではないか、その思いは、実家に戻りたいという晃工さんの思いより遙かに強かったのではないかと想像します。

晃工さんは、この手紙に発奮し次々と作品を発表し、日本の彫刻界を代表する作家となりましたが、その母は、この手紙を出した翌年、病死したと伝えられています。（塾頭 吉田 洋一）